



郷土の鎮守様として親しまれている宇賀神社



今では珍しくなった神輿のお浜おり



江戸後期建立の良福寺仁王門



なじみ深い松岸駅構内

松岸編

松岸の紹介

1. 地名の由来

奈良時代にできた日本最古の歌集である『万葉集』に近隣である三宅の地が読まれている。鹿島の崎から三宅の浦に向かって船出する情景である。

その後、利根川の東遷等もあり、『利根川図志』には銚子往来の旅人、この河岸よりあがるとあり、目標になるような松の巨木があったのではないかとされている。

事実、昭和40年代頃までは、現在の松岸駅周辺にかけて、多くの松が繁茂して松の字がつく土地柄をうかがわせる光景が展開していた。

なお、記録された最古の「松岸」の地名は、天正4年（1576）の常燈寺文書の中に出てくる。

2. 松岸の時代的変遷

〔中世〕松岸村

戦国期にみえる村名で、下総国三崎荘の内にあった。

常燈寺（銚子市常世田町）所蔵大般若経巻408の天正4年10月17日付奥書に「下総国三崎荘海上本庄浦内松岸村住呂権少僧都照誉書之畢」とある。（県史料諸家）

〔近世〕松岸村

江戸期から明治22年の村名で、下総国海上郡に属していた。

天正19年10月25日付け水帳には「下総海上郡三崎庄まつきし」とある。（区有文書・県史料諸家）

『各村級分』では、幕府領「旧高旧領」では旗本朝倉氏領で、村高は、『元禄郷帳』『天保郷帳』ともに184石余りである。

元和年間の戸数94軒、人口439人であった。

この頃、利根川の河岸で、水運の発達に伴い、遊廓^{ゆうかく}などもできて賑わいをみせた。

文化9年、小林一茶は、当地で「絵団扇^{えうちわ}やあつかましくも菩薩顔」と詠んでいる。（七番日記）

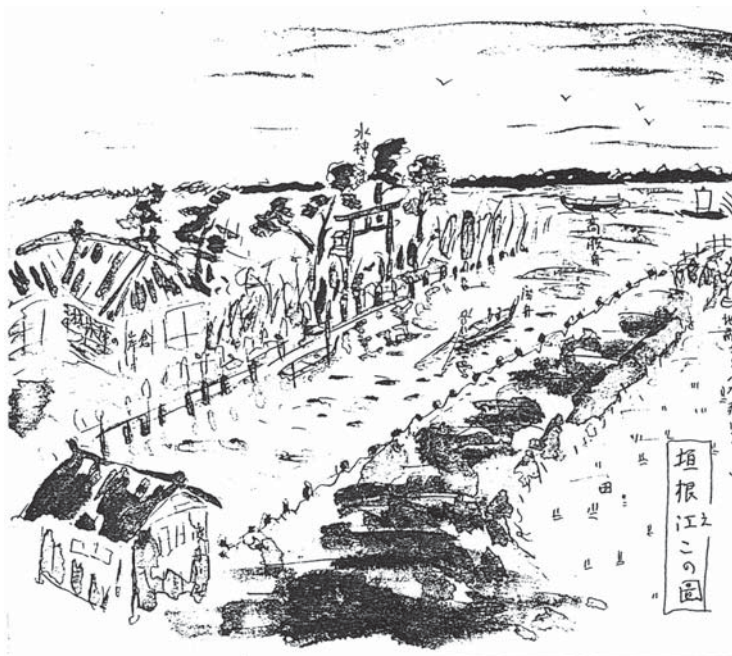
この地には宇賀神社が祀られていて、隔年^{かくねん}ごとに神輿が海上八幡宮に随行し、外川浦へ神幸した。（銚子市史）

寺院は真言宗良福寺があり、仁王門及び仁王像は江戸中期のものと伝えられている。

垣根編



垣根の長者の伝説で有名な仁王様の仁王門



大正時代の垣根渡船場（えご）の風景



明治時代が懐かしい
「あめ売り」

垣根の紹介

1. 垣根の時代的変遷

地名の由来はさだかではないが、垣根長者の伝説から長者屋敷の垣にちなむとも、かつて牡蠣^{かき}を多く産出したことによるとも伝えられている。柿根とも書いた。

(田中玄蕃家文書『先代集』)

〔中世〕かきね

南北朝期にみえる地名。下総国のうち、応安7年の海夫注文に千葉一族海上氏知行分の港津として、「かきねの津」が記載されている。(旧大禰宜家文書 県史料香取)

〔近世〕垣根村

江戸期から明治22年まで、下総国海上郡垣根村とよんだ。はじめ旗本松平氏領、元和元年佐倉藩領、『各村級分』では幕府領、享保2年幕府領、同年7月からは、高崎藩領とかわった。

村高は、『元禄郷帳』では73石余、『天保郷帳』「旧高旧領」ともに80石余である。

文化6(1809)年の家数25軒、人数107人である。安政5(1858)年の『銚子領村々記録』(船橋市西部図書館蔵)では米53俵余、金4匁6分余で、家数26軒、人数135人となっている。江戸往来筋で茶屋があったという。

村名主一覧(角田家の古文書により判明した分)

元禄8年 名主 治右衛門 天明3年 名主 平八

享和2年 名主 惣兵衛 天保9年 名主 平吉

梅宮神社が鎮座し、真言宗智山派阿弥陀院は垣根の長者屋敷跡と伝え、境内の仁王尊は垣根仁王尊として親しまれている。

明治8年に千葉県に所属、明治7年に石毛岩三郎が、阿弥陀院に長者学校を開設、同年垣根学舎と改名した。生徒数約120人であった。その後、明治22年に海上村の大字となる。

〔近代〕垣 根

明治22年から昭和12年まで、大字名として垣根と呼ばれていた。明治24年戸数は48軒、人口238人、厩11、船11と記録されている。

昭和12年からは、銚子市の垣根町1～2丁目、垣根見晴台となった。昭和25年の人口は447人、世帯数は76軒、同50年の人口は505人、世帯数は120軒と年々増えてきた。

柴崎編



県有形文化財指定の源氏ゆかりの海上八幡宮本殿



市指定有形文化財東円寺本尊
阿弥陀如来坐像と脇侍立像



千葉県指定文化財天正検地帳（7冊）

柴崎の沿革

柴崎町は、銚子市の「うなかみ」と呼ばれる地域のほぼ中央に位置し、市の中心部から小見川に通じる国道356号線を約5キロメートル西進し、道路が飯岡、旭方面に分岐する一帯にある。

古くは海上八幡宮の鎮座する八幡山の南側に展開した集落で「うなかみ」で最も面積の広い町である。

地勢的に集落地は平坦で沖積層^{ちゅうせきそう}だが、南側台地は、赤土である。東は松岸、垣根と隣接し、西は三宅川を境にして四日市場、三宅と接続し、北は八幡山を境にして四日市場に隣接している。南は2丁目から7丁目に至るまで、田畑山林の起伏が連なり、町の中心部から約4キロメートルを隔てて小浜、親田と隣接している。

これらの広大な町域は、近世にはげしく土地の争論を繰り返した入会野裁判^{いりあいや}の結果、入会野が村々の分割持ちとなった、その名残である。

柴崎という地名が文書に出るのは、中世末期以降であり、その頃は近隣の村々も含めてただ漠然と「堀之内^{ほりのうち}」と総括されていた。

柴崎村最古の公文書は、天正18年8月、関東に入国した徳川家康が同19年（1591）10月9日に実施した検地帳7冊（千葉県指定文化財）であるが、この表題には、「下総国海上郡三崎庄堀之内枝柴崎之郷」とある。ただし以後、近世を通じて、単に下総国海上郡柴崎村と呼称されている。

天正検地帳に記載の居屋敷は40戸、耕作人128人、面積47町歩余とあり、文禄5年（1596）柴崎村は、旗本揖斐與右衛門の知行地となり、幕末まで続いている。

元和3年（1617）高持百姓は39戸、石高不明で年貢高472俵余（柴崎町区有文書）とあり、正徳3年（1713）農家台帳では高持百姓は81戸となる。（註：分家が進んだため）

延享4年（1747）の村高422石6斗余、年貢高545俵余とあり、天明7年（1789）には、村高432石4斗余、年貢高538俵余と変遷し、幕末安政2年（1855）高持百姓は87戸となる。

神社は郡中惣社の海上八幡宮があり、大同2年（807）九州の宇佐神宮を分祀勧請したと伝わっている。この社は守護・地頭等の篤い信仰を請けており、中世には、千葉氏、海上氏等の寄進を受け、その寄進状が現存している。

天正19年（1591）11月には、徳川家康から神領30石を寄進されている。

大祭は、6月15日と8月15日（ともに旧暦）であり、夏の御神幸祭には隔年毎に外川浦に神幸し、この時は、松岸村の宇賀神社と長塚村の天御中神社^{あめのみなかのじんじや}も随行した。

寺院は天台宗東円寺があり、養老年間（717～23）に僧行基の開山した古刹であり、こ